

インクルーシブ保育の質を問う社会へ

香川大学 松井剛太

本調査研究におけるインクルーシブ保育の定義

- インクルーシブ保育とは、障害の有無、国籍、性別、性的指向に関係なく、すべてのこどもが一緒に過ごし、育ち合う環境を作る保育の形態であり、すべての人が共に生きる「共生社会」の実現に向けた基盤を築くもの

保育の形態=前提となる必要条件に過ぎない

十分条件=「一緒に過ごし、育ち合う」の内容を問う

「インクルーシブ保育をやっていきます」と言われても

- あふれている能力主義（エイブリズム）の言葉

グレーゾーンの子ども

その子どもなりの発達

- カームダウンのスペース

場違いな人が使う場所という位置づけ

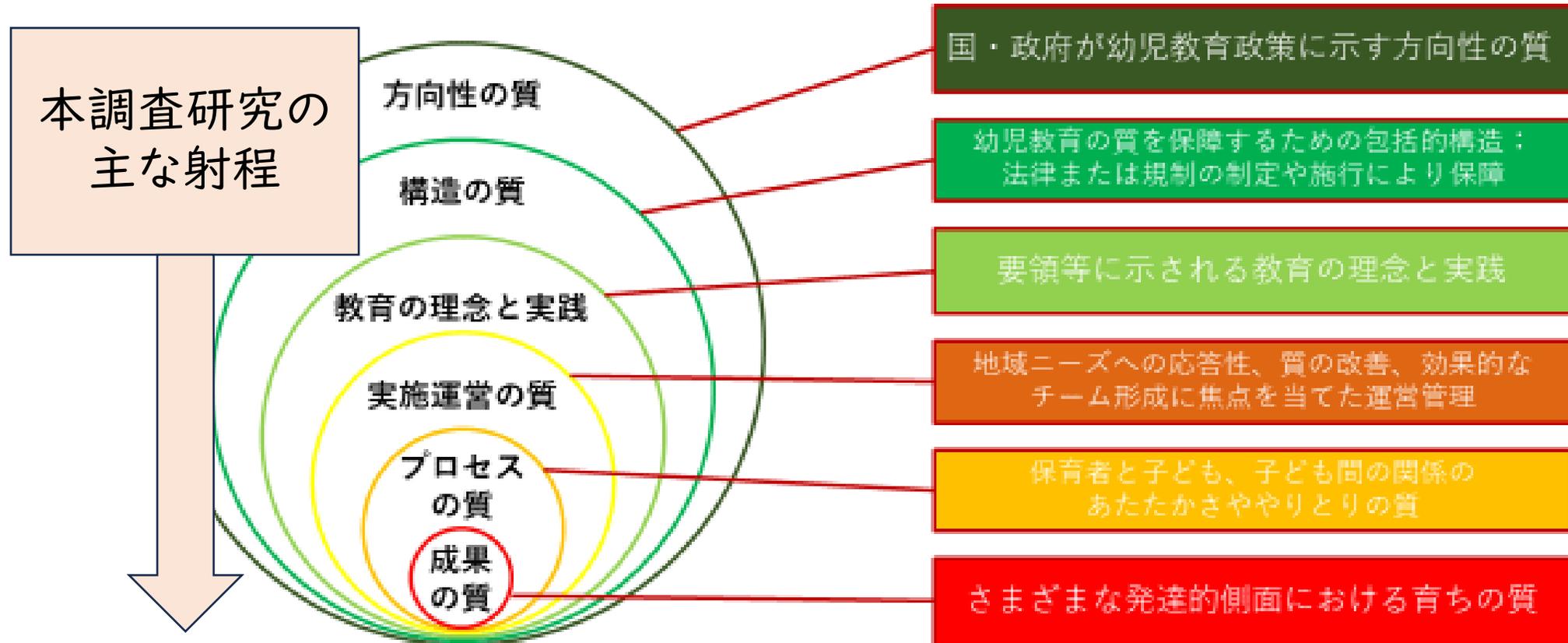
インクルーシブに向かう保育という視点

インクルーシブに向けた保育の実践においては、現在の保育現場において提供されている保育がインクルーシブな状態にあることを複数の観点から確認することが重要である

インクルーシブな保育の状態を確認するための観点



保育の質に関連づけると



人権モデル

- 社会モデルは、社会のどこに障害を生み出す環境があるのかを発見する装置として機能する。
- 人権モデルは、社会モデルによって発見された障壁をどのように除去したら、障害者の尊厳が保たれるのか、その方針や方向性を検討する。

Lawson, A., & Beckett, A. E. (2020). The social and human rights models of disability: towards a complementarity thesis. *The International Journal of Human Rights*, 25(2), 348–379.
<https://doi.org/10.1080/13642987.2020.1783533>



A child rights-based approach

- 子どもの権利条約（国連、1990年）
権利主体としての子ども

年齢や能力、その他の背景にかかわらず、すべての子どもに保障されている。

子どもの権利条約第12条の「意見」は、英語の原文では「Opinion（意見）」ではなく「View（見ること）」

子どもたちの感情、信念、思考、ねがいなど、相手とのやりとりを通じて表現する行為を含む

大人に求められるまなざし

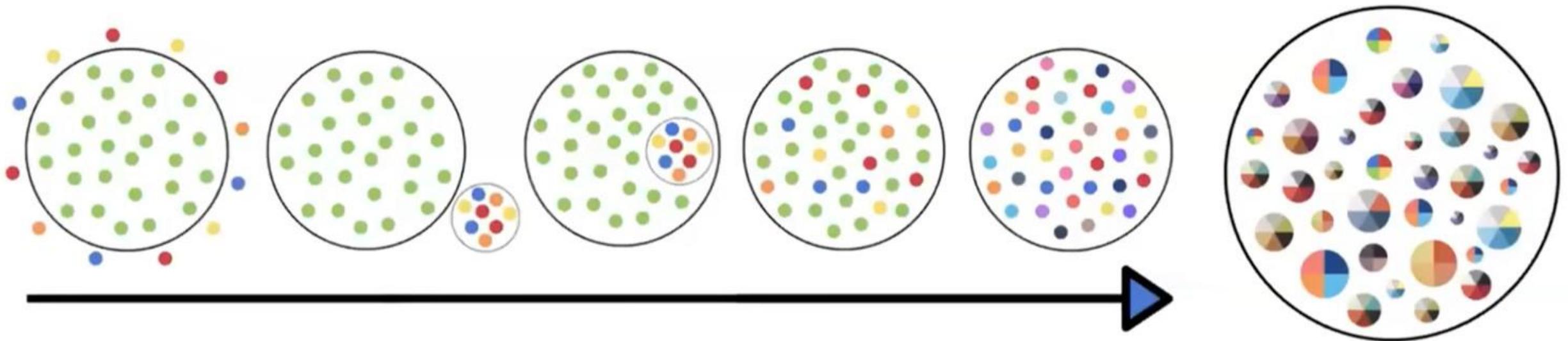
一方的・評価的なまなざし

- こういうところができているとか、こういうところがいいとか、教師が子どもの能力や態度を計測する見方

共感的・ケアリング的まなざし

- 目の前の子ども自身がいま何を願い、何にもがき、何を越えようとしているのか、と教師が関心を向けつつけようとする見方

インクルージョンの向かう先は？



where are you on this continuum? what's the next step?

ご清聴ありがとうございました

2024年7月26日発売

【著者】松井剛太・松本博雄

子どもの声からはじまる 保育アセスメント

大人の「ものさし」を疑う

近年、国際的に幼児教育への投資効果等に関心が高まる中で、外的に読み取りやすいアセスメント（ものさし）が求められている。しかし、固定化された「ものさし」によって見失うモノがあるのではないかと。本書では、子どもの声に耳を傾け、対話し揺らぎながら、大人の「ものさし」を疑い、新たなアセスメントのカタチを探る。

子どもとの対話から生み出されていく 新たな「アセスメント」のカタチ

子どもへのものさしも保育へのものさしも、ひとつではない。多様なものさしはどのように生み出され、保育の質を高めていくのか。最新の国際動向と国内のユニークな実践から解き明かしていくその先には、
共生社会実現への手がかりが確かに見えてくる。

久保山茂樹

国立特別支援教育総合研究所



下記 URL および QR コードからフォームにアクセスし、説明をよくご覧のうえお申込ください。

お申込みフォーム

<https://forms.gle/RD2zrkJAHVNYUWpFA>

